

正 信 念 仏 偈 2 3

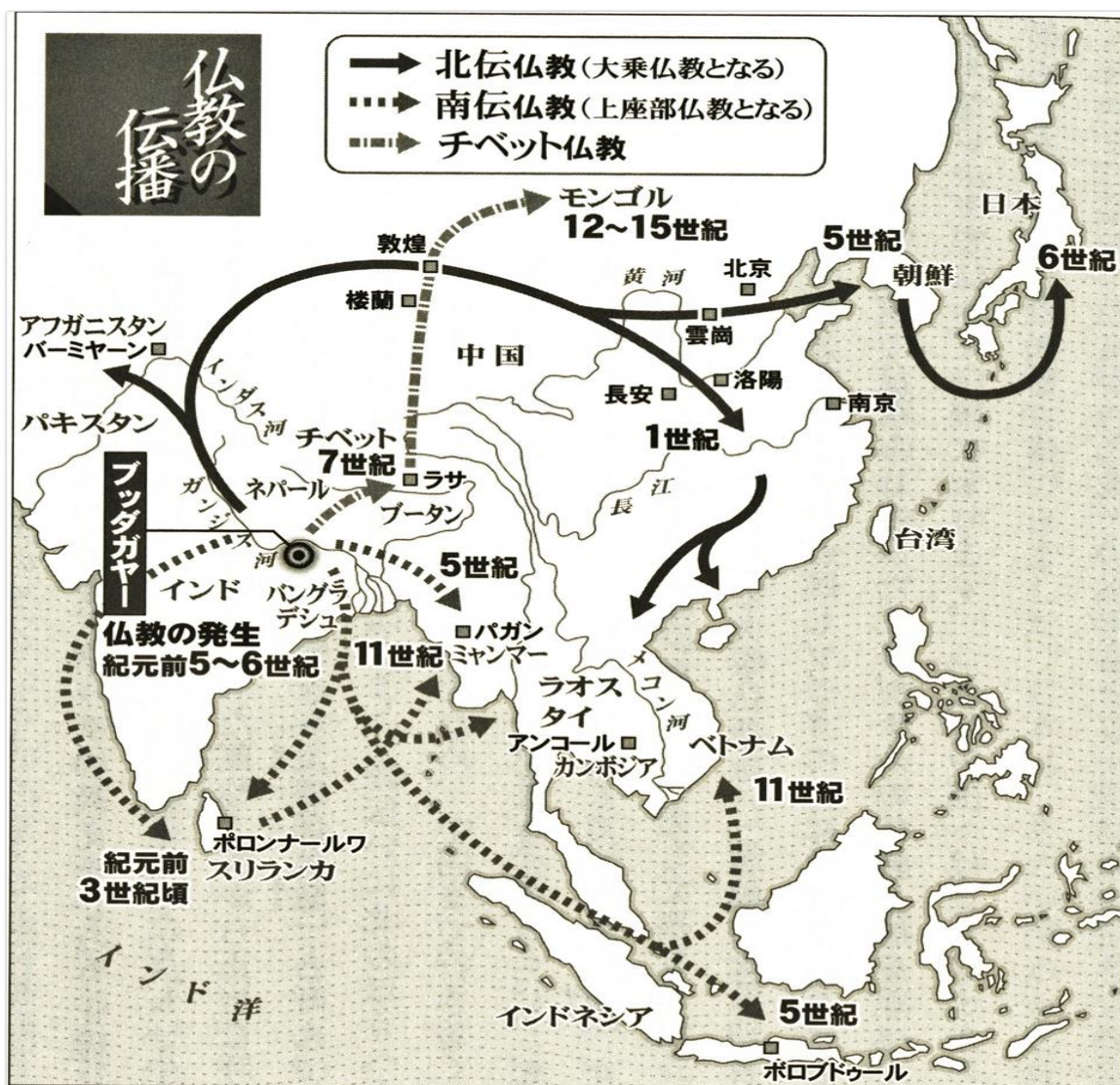
■曇鸞讚①

本師曇鸞梁天子 本師曇鸞は、梁の天子、
常向鸞処菩薩礼 常に鸞のところに向かひて菩薩と礼したてまつる。
三蔵流支授浄教 三蔵流支、浄教を授けしかば、
焚焼仙経帰楽邦 仙経を焚焼して楽邦に帰したまひき。

現代語訳

曇鸞大師は、梁の蕭王そうおうが常に菩薩と仰がれた方である。菩提流支ぼだいりし三蔵から浄土の經典を授けられたので、仙経を焼き捨てて浄土の教えに帰依された。

~~~~~



曇鸞大師 (476~542) 67歳 往生 ※538年、日本に仏教公伝

○「本師曇鸞梁天子 常向鸞処菩薩礼」

- ・四論を学ぶ (『中論』・『十二門論』・『大智度論』・『百論』)
  - ・梁の皇帝、蕭王から学識・人格を評価され、「曇鸞菩薩」と敬礼される。
- 『高僧和讃』

魏の天子はたふとみて 神鸞とこそ号せしか  
 おはせしところのその名をば 鸞公巖とぞなづけたる

○「三蔵流支授浄教 焚焼仙経帰楽邦」

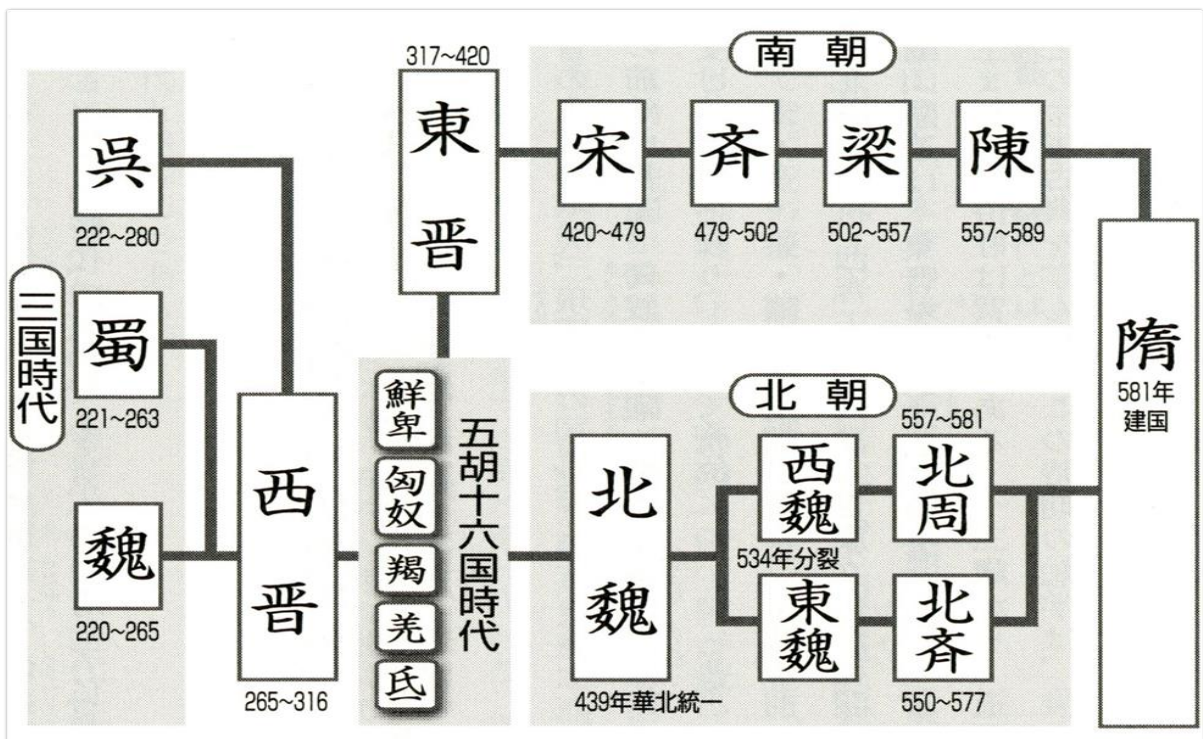
曇鸞大師は、『大集経』<sup>だいじつきょう</sup> 30巻の註釈を完遂させる為に長寿を求める。

⇒長生不死の仙術を説いていた陶弘景<sup>とうこうけい</sup>を訪ね、3年間修行して仙経10巻を授

与される。帰途、洛陽にて菩提流支<sup>ぼだいりゅうし</sup>三蔵と出会う。菩提流支に「仏法の中に仙経に勝る長生不死の教えはあるや」と尋ねると、菩提流支は地に唾して、「言語道断、たとえ長生きをしても結局は死に、迷いの世界を流転するにすぎないではないか。仏教には悟りにいたって無量の寿命を得る法がある」と教える。この時『観無量寿経』を授かり、仙経を焼き払い浄土教に帰依。

『高僧和讃』

本師曇鸞和尚は 菩提流支のをしへにて  
 仙経ながくやきすてて 浄土にふかく帰せしめき



## 【北朝（386～577）】

※581年、隋王朝の成立

◇国家による仏教の保護と太武帝<sup>たいぶてい</sup> [《北魏》在位 423～452] による、  
廃仏毀釈（446～452）。「三武一宗の法難」の最初

- ・国家の公認により積極的な保護を受けた仏教教団は、莫大な財産の所有や出家者の増加によって、腐敗・墮落の方へと傾いていた。
- ・446年に廃仏が行われ、多くの出家者が殺され、寺院や仏像、経典が焼かれた。
- ・皇帝の交代により仏教は復興し始める。
- ・460年、曇曜<sup>どんよう</sup> [生没年不詳] による雲崗石窟寺院<sup>うんこうせきくつ</sup>の造営の開始  
→ 太武帝による廃仏からの復興の象徴

◎このような時代状況の中で曇鸞大師（476～542）は登場する

## 曇曜と雲崗石窟



